

平和 暮らし 健康 介護

みんなの健康

安心のネットワーク

発行

郡山医療生活協同組合

郡山市島2-9-18 TEL 024-923-6212 FAX 024-923-6921

発行責任者 橋本恭司

郡山医療生協ホームページアドレス

http://www.koriyama-h-coop.or.jp/

東日本大震災 特集号



◆**ミニデイサービス準備会結成へ**
 ◆**地震直後の声かけから**
 とみた支部の佐藤敏さんは、地震直後、隣家の一人暮らしの86歳の女性宅に向かい、中で座布団をかぶってうずくまっていた女性を、自分の家に「避難させました。その後すぐ「みんなの健康」配付先の組合員さんや近くの一人暮らしの方などの家をまわりました。ふだんはほとんど会話のない方からも「わざわざこんな大変な時にきてもらって、本当にありがとう」と感謝されました。

百合ヶ丘ウオーキング班長の濱尾直美さんは、翌日から百合ヶ丘町内会による全戸訪問活動に役員として参加し、顔を見て話をしながら声をかけることの大切さを改めて感じたといいます。

◆**班活動から生まれるキツナ**
 佐藤さんは、「班の活動を通して、上がったことのない班員の家に上げてもらって、ご飯をこ



馳走になったりという関係ができていたことが、こういう非常時に生きてくる」といいます。

地震で同じ班の仲間の高齢女性の家が半壊し住めない状態になりました。佐藤さんはこの方を自分の家に1週間泊めて、医療生協や地域包括支援センターなどと相談し、市内のケアハウスに入所させることができました。

濱尾さんも「町内会の大きいところでは、班単位でもなかなか交流を持っていないところも多い。生協の班のいいところはここに仲間がいるか分かるというところ。非常時にはお互いの本音がわかるが、班の仲間はふだんからそういう本音をいっしょに考えています。」

とみた支部では、このような頼られる関係を町内に作りたいという思いが強まりミニデイサービスの準備会が発足しました。

大震災・原発事故に立ちむかう

医療生協の助けあい

郡山高校の避難所へ
組合員と職員で
支援活動



◆**班会や支部行事で励まし合い**
 「かがやき講座」が無事終了し、ホッとしていた矢先被災した田村理事。ひまわりの家へ駆けつけ、被害がないことを確認。その後、近所の青果店で卵、バナナ、りんご、缶詰め等を購入し、買い物に行けないお宅に届けました。南相馬市からの避難者の方には、子供のための特別食の手配と郡山保健所へ相談しミルク2缶を届けました。3月16日には運営委員の安否確認を行い、家でテレビを見ていると不安で仕方がないので、みんなで顔を合わせたいと余震の中、3月22日水門班会を開催し、励まし合いました。あぶくま班では、みんなを励ます賛歌をつくり歌いました。



◆**震災後の訪問活動から**
 ◆**手を握って喜んだお年寄り**
 支部長の千葉慶一郎さんは、震災直後から、気になる一人暮らしの組合員を訪問。皆さんは千葉さんの顔を見ると、「様に安堵した表情になり、中には握手を求めてくる方までいました。さらに、高齢者の近くに住む組合員さんに見守りをお願いすると、大きな余震のあった直後に訪問して安心させることができた」と連絡が入りました。

小野支部は昨年5月からミニデイサービスを開始し、町内の単身高齢者などの交流の場となっています。この活動に参加し地域の民生委員も務める小林芳子さんは、原発から避難してきている広野町民の方に自宅での洗濯や入浴を提供するなど、組合員さんのボランティアでの活躍も注目されます。

千葉さんは、「組合員訪問が重要なことを痛感しました。顔の見える支部活動、そのため機関紙「みんなの健康」100%手配りが基本です」と、震災の教訓をいかした今後の支部活動の目標を見すえています。

三穂田支部

**3月28日、矢ヶ崎克馬琉球大学
名誉教授による放射線測定調査活動**

野菜農家組合員宅を訪問し、農地(田)の放射線量を測定。地上1mで3.0μSv、表土の藁屑から4.66μSv、表土から3.23μSv、地中2cmで2.0μSv、7cmで1.20μSv、10cmで0.88μSvの深さでの測定値でした。その後、町内西部の観光ぶどう園(組合員)に行き同じ調査を行った結果、数値は問題にするほどではありませんでした。次の日矢ヶ崎先生が貸してくれた測定器で「なら」農家に農業委員や区長、組合員も含めた10数人で各種持ち寄った野菜を測定。放射線や放射性物質についてのミニ学習会を行いました。そのなかで「風評被害で果して売れるのか、出荷できても値下がりするのでは」などの不安が出されました。

中田支部

トップをきって中田支部総会
 人のつながりはやっぱり大切!

4月21日、中田支部の総会が開催されました。今回の震災で得た教訓は、「人のつながりがやっぱり大切」ということで、中田支部3ヶ年計画の「町内会ごと(13地域)に班をつくらう」という目標の実現を目指しています。

また、橋本光好理事が、「正しい知識を持って不必要に恐れず、しかし、生活と命を左右する原発問題がどう収束するのか、目を向けて声を上げる必要があるのではないか」と発言し、原発問題が農村地域にダイレクトに関わっていることを痛感する総会となりました。

結びつきと信頼を基本に

3月11日に発生した東日本大震災は地震に引き続く津波の規模や被害の大きさ、福島原発事故による放射線被害など未曾有の災害となりました。犠牲者のご冥福をお祈りするとともに、被災者の皆様方に心よりお見舞い申し上げます。

郡山医療生協では災害対策本部を立ち上げ、全職員が全力を尽くして患者の安全と事業を守りました。組合員からの物資の提供や学童保育の設置、医療福祉生協連や民医連など全国の仲間からの物資の提供や支援は、私たちの活動の支えとなり、励ましとなりました。

多くの職員や組合員が被災する中で、市内の病院からの患者の受け入れや浜通りからの避難者への医療支援や物資の提供など支援活動を進めることもできました。

大震災と原発事故による被曝への対応は、今後長期間続くと思われ、かつて経験したことのない災害に、対峙していくためにも、この間の震災対応から教訓や課題を学び、今後の活動に生かしていくことが大切です。人と人の結びつきと信頼を基本に、被曝から私たちの健康や生活、住み慣れた地域をどう守っていくか、私たちはどう行動すればいいのかなど大いに知恵を出し合い、協力し合っていきたいと思います。

郡山医療生活協同組合
 理事長 橋本恭司

支援を受けるだけでなく、出来る支援は積極的に

事業所と職員の生活を守りながら、被災者や他団体への支援も積極的に行なってきました。

震災で倒壊した他病院からの入院患者受入れ、大熊町から郡山高校に避難している方々からの要望に応じてバスで送迎しての臨時外来の開設(郡山高校避難所への支援はその後も継続されました)、避難所への医療スタッフの派遣、介護保険事業部では要介護者を対象とした臨時避難所の設置と安否確認の訪問活動を行ってきました。

全国から寄せられた支援物資の約七割は、くわの福祉会、郡山市社会福祉協議会、郡山市災害対策本部、郡山高校や安積高校、田村市体育館、南三陸町などの避難所、小規模作業所や施設、浜通り医療生協へと届けました。「支援物資をとどめない」を合言葉に、支援物資が到着すると直ぐに仕分けし、有効活用させて頂きました。



支援物資は出来るだけ早く他の団体へもお届けしました



大熊町からの避難者受入れのための臨時外来



新入職員もがんばりました



避難所での血圧測定



全国から支援物資が次々に届きました



全国からの励ましが、大きな支えとなりました

震災直後から、全国の医療福祉生協連、全日本民医連、日本生協連に加盟する法人や事業所から、たくさんの支援物資と励ましを頂きました。

支援物資は、紙オムツ、衛生材料、食材、食器、粉ミルク、トイレトペーパー、生理用品、衣類、ふとん、毛布、軽油、ガソリンと多岐にわたりました。また、浜北医療生協からは、震災で使用不能となった細隙灯顕微鏡とゴールドマン視野計を贈って頂きました。

紙オムツや衛生材料は病棟へ、食材は食養科と買い物に行けない職員へ、軽油やガソリンは公用車や職員の通勤に、粉ミルクや子供用の紙オムツは保育園へと、支援物資は臨時避難所の設置や病院の機能の維持、職員の生活再建の大きな支えとなりました。



夜中に支援物資の搬入を終えて



細隙灯顕微鏡



ゴールドマン視野計

桑野協立病院も、組合員センターも、つくしんぼ保育園も悲鳴をあげました

3月11日午後2時46分、かつてない大地震は、建物を激しく揺らし、室内の書架やカルテ棚をなぎ倒し、新館と旧館の境には亀裂が走りました。屋上の冷却塔は倒れ、保育所は屋根や壁が崩落しました。ボイラーの緊急停止と給水設備の損壊で給水、給湯、暖房が全て使えなくなり、内視鏡や血液検査も出来なくなりました。

病棟にいた医師や看護師は病室に走り、点滴スタンドやベットの抑え、患者の安全を確保。幸いなことに人的な被害は軽傷の職員1人のみで、外来や入院中の患者には直接的な被害はありませんでした。余震が続く中で、受付前に職員が集まり、被害状況の確認と復旧へ向けた取り組みが始まりました。



新館と旧館の繋ぎ手が最も大きな被害を受けました



カルテ棚や書架はそのほとんどがなぎ倒されました

不安を抱え、悩みながら想いと力を寄せ合って、大震災・原発事故と向き合っています。

自宅の被害や家族の心配、原発への不安を抱えながら、復旧作業と日常診療を続けていました。地震直後から水道が回復するまでの1週間を各職場からの報告から紹介します。

- 患者の安否確認後ベットの高さを一番低くした。休み中の職員も自宅が被災した中出勤し、片づけにあたる。
- 地震の最中、患者が動揺しないように手を握っていたら、手を払いのけられた。「私に構わず逃げろ」という意味だった。
- 救急隊より星総合と保科病院が倒壊し、電話もつながらないで連絡がとれない状態に陥る。救急搬入される場合があるとの連絡を受け、外来の椅子をずらしてスペースを作った。
- 水の確保のため浴槽に水を貯めた。トイレの水は男性職員による汚水用水の配備があり助かった。
- 自宅から水やおにぎりの差し入れを持って通勤してくる職員が始めた。また、支援物資が職員へも配布され、不安が1つ解消された。
- 原発事故による不安が小さい

- 子供を抱える職員を中心に増大した。遠方の親せきから直ぐに入ったり、家族からの電話で、職員にも動揺が走った。
- 事務当直は3月末日まで複数体制としたが、常時4〜5人は泊まっていた。携帯がつかないため、拘束当番で宿泊した職員もいた。
- 断水のため、内視鏡、透視、生化学検査、滅菌業務は停止。滅菌物は院内のストックで対応した。
- 震災から1週間の外来患者数は普段と全く変わらず入院患者も2つの病棟とも50床以上で推移した。
- 強い揺れが収まってから、訪問系の事業所では一斉に安否確認を行った。
- ガソリンの確保が事業継続のカギを握った。情報を頼りに交代で並んだりして確保に努めた。



深夜、給水車から飲料水を確保して食養科へ



配膳はバケツリレー方式で

写真は、震災直後の患者給食です。ガスが止まり、断水という条件のもとで、乳製品を除いてはばいつもの食事が提供されました。食養科では、非常時の給食マニュアルを作り毎年防災の日に訓練を重ねていました。食材は組合員や全国からの支援で賄い、飲料水は男性職員が運び、エレベーターが使えない中で、配膳は職員がバケツリレー方式で行いました。みんなが頑張った、今回の震災への対応の特徴が全て詰まったひとコマです。



組合員センターも被害を受ける



保育園は使用できなくなりました



冷房用のタワーもこのままでは使用できません

対策本部を中心に、職員の意見や要望を大切にして、組織的に取り組んできました

震災直後に、宮田専務を本部長に、坪井院長、江川事務長、佐藤看護部長、新田介護保険部長、朽木次長、花見次長で対策本部を設置。「患者・利用者の安全と職員の生活を守るため、事業を継続する」ことを明確に打ち出しました。

対策本部と職責者の打合せは毎日行い、重要な局面では全体集会を開いて方針の徹底を図りました。対策本部は、保育所の移転、学童保育の開設、被曝問題学習会、法律相談会、臨時宿泊所の設置、メンタルヘルス学習会の開催など、職員から出された意見や要望、不安への対応を行い、「対策本部ニュース」を毎日発行してきました。

学童保育では、先崎理事・小泉理事をはじめとした教員OBの組合員さんに、被曝問題ではわたり病院の斎藤紀先生に、メンタルヘルスでは埼玉協同病院の雪田慎二先生に、法律相談では斎藤正俊弁護士と菅野隆社会保険労務士に、それぞれご支援を頂きました。全国連帯や組合員との協力は物資だけではなく専門家の派遣にも大きな力となりました。



毎日行われた対策会議



斎藤 紀先生



雪田慎二先生



臨時で開設された学童保育



全体集会は、3/15、16、26と3回開催しました

放射線と私たちの健康



桑野協立病院
放射線科 中里史郎

放射線ってどんなもの？

放射線の種類には、「アルファ線・ベータ線(電子)・中性子線」などの粒子。「X線ガンマ線」の電磁波(光の仲間)などがあります。

桑野協立病院で扱っている放射線は「X線」で、X線よりエネルギーの高いガンマ線やアルファ・ベータ線は、放射線治療や放射線同位元素R-1検査に利用されています。

年間被曝線量限度について

日本の年間被曝線量限度(2007年ICRP勧告)は、表に示した通りです。「職業被曝限度」は、病院で働いている放射線技師や原発で働いている技師などです。「公衆被曝限度」は、一般の市民です。

年間被曝線量限度(2007年ICRP勧告)		
限度の種類	職業被曝限度	公衆被曝限度
実効線量(外部と内部合わせて)	5年間平均20mSv/年(1年は50mSv以下にする)	1年間1mSv/年 *20~100mSv以下/年 「放射線事故など非常時」
眼の水晶体	150mSv/年	15mSv/年
皮膚	500mSv/年	50mSv/年
手足	500mSv/年	50mSv/年

放射線を表す単位

シーベルト(Sv)とベクレル(Bq)があります。シーベルトは、人が放射線を浴びたときに使う単位。ベクレルは、放射線の強さを表します。ベクレルからシーベルトへの換算をしてみます。

例えば野菜の場合

- ①セシウム500Bq[kg]が出た野菜を1kg食べた時の被曝線量は、
 $500 \times 1.3(\text{係数}) \times 0.00001 = 0.0065\text{mSv}$
 - ②ヨウ素2,000Bq[kg]が出た野菜を1kg食べた時の被曝線量は、
 $2,000 \times 1.6(\text{係数}) \times 0.00001 = 0.032\text{mSv}$
- ※野菜の放射線規制値(値は食品により異なります)
- セシウム=500Bq/kg ●ヨウ素=2,000Bq/kg

国が設定した、非常時1年間20mSvの意味

職業被曝限度1年間20mSv被曝したとして、5年続くと100mSv。10年で200mSvになります。定年まで50年働いた場合、被曝線量は1000mSvです。1000mSv被曝した場合のがん発生リスクは、0.1%~1%の範囲の増加です。そこで考えるに、東京電力が示した「工程表」の通り原発の修繕が行われれば、50年間今の事態が続く事はありませんか

原発公害

これからの不安を共有して



桑野協立病院
院長 坪井正夫

医療の現場で、放射性同位元素やX線を扱いながら仕事をしている。長い間の仕事となった。その中で何時も思うことは安全で体に良いという放射性物質や放射線はこの世の中には存在しないということだ。だから、それらを活用するときは空間と線量には厳密な規定がある。

原発事故によって、今の私どもの生活空間は、量的には差があるとはいえず、危険物が広く存在し不安に満ちあふれたものだ。原発公害環境と呼べる。科学者の端くれとして、国際的な基準、日本社会基準は理解できる。毎日各地の線量をチェックしている。正直言つて不安を何時も抱えている。安全基準というのは危険指標と同じと思う。

桑野協立病院の職員は、命の危機に直面しながら、放射線のことを気にしながら、自分の子供達を仮設の保育所に預け、懸命に復旧作業に当たった。今も同じだ。

避難者の支援に当たり、自分が被災者であるというのを忘れてもいた。少し落ちついた今になっても不安

ら、リスクはさらに低くなります。非常時1年間20mSvの意味は、職業被曝限度の裏づけからも、読み取ることが出来ます。また、「放射線医学総合研究所」によると、積算線量が100mSv未満では、がんを引き起こされるという科学的な根拠はない、と言っています。

例えば、郡山市の積算線量を考えてみます。1時間当たり1.8μSv(マイクロシーベルト)を放射線量として、

1日24時間ずーっと外にいる人はいないと思いますが、 $1.8 \times 24 = 43.2 \mu\text{Sv}$ 1年365日では、 $43.2 \times 365 = 15,768 \mu\text{Sv}$ (約15.8mSv)ということになり、20mSvを下回ります。

最後に。東京電力から工程表が出されましたが、1日も早く「原発から放射性物質を止めること」で普通の生活に戻ることができるよう、切に願っています。

医療福祉生協連から被災地へ義援金が送られました

医療福祉生協連には、全国の組合員から多くの義援金が寄せられています。福島県の自治体と加盟医療生協に以下の義援金が送られました。

福島県	1,000万円	福島医療生協	100万円
福島市	500万円	福島中央市民	100万円
郡山市	500万円	郡山医療生協	100万円
いわき市	500万円	浜通り医療生協	100万円



郡山市の原市長へ義援金を手渡しました
(左より、原市長、藤谷医療福祉生協連専務理事、橋本郡山医療生協理事長、宮田同専務理事)



“ひなたぼっこ”

5月11日
オープン!

震災の影響により修理や手直しが必要になり1ヶ月以上完成が遅れていましたが、5月11日桑野協立病院の西側にオープンしました。

施設の概要

- 1階** ふれあいデイサービス [定員40名]
桑の実デイサービス [定員12名]
地域交流スペース「いっぷく」
- 2階** グループホームひなたぼっこ (定員9名)
小規模多機能型居宅介護ひなたぼっこ [定員25名、通所15名、宿泊5名]

